幼児の両足連続跳び越しによる調整力の調査
－和歌山市における５園と全国の比較から－
Assessment of Adjustability in Early Childhood through Continuous Bilateral Hop: A Comparative Study of Five Preschools in Wakayama City and Nationwide Data

森﨑陽子　中村俊之　前島美保　飯田まなみ

行動を調整する能力の指標となる両足連続跳び越しの測定を実施し、幼児期の調整力機能の把握と発達を促す人的・物的環境の在り方や幼児の社会性や心理的発達との関連性を見出すことを目的とした。和歌山市における５園を調査した結果、対象児では男児の方が優れ、特に５歳児前半の男児は全国平均（森ら 2017）より高かった。調整力の向上には保育中の多様な運動経験と十分な運動量の確保が重要であることが示唆された。さらに、社会性や心理的発達との関連についても一定の傾向が読み取れた。

キーワード：調整力、両足連続跳び越し、幼児、社会性・心理的発達

1　はじめに

森ら（2017）は、1966 年以降 40 年以上にわたって、幼児の運動能力の発達に関する全国規模の調査を、MKS 幼児運動能力検査（1961 年に発表された東京教育大学体育心理学研究室が開発した運動能力検査を数次にわたって改訂したもの）を用い、「25m 走」「立ち幅跳び」「ボール投げ」「両足連続跳び越し」「体支持持続時間」「捕球」の６項目を継続的に実施し、幼児の運動能力の時代推移に関する報告を行った。この調査から 1980～90 年代半ばにかけて幼児の運動能力は有意な低下がみられ、子どもの運動能力低下はすでに幼児期からの問題であることを明らかにした。

文部科学省（以下文科省とする）も、同測定方法を用い 2007～2009 年の３年間実施した。３年間には実践園に幼児期に適切と考えられる運動刺激を与えることでその効果の推移を確認し「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」（文科省 2012-a）としてまとめている。その分析内容は、「幼児の発達の特徴」「幼児の基本的動作の状況」「子どもと保護者」「子どもと担任」「生活習慣や意欲」等と多岐にわたり幼児の運動能力との関係性を分析し成果の要因を探求している。2012 年には、幼児期運動指針（文科省 2012-b）として、幼児期における運動の必要性を訴え、ガイドブックには、1 日 60 分以上の運動の奨励と幼児期の形態の発育から視て幼児期に伸ばしておきたい運動機能として調整力を挙げ、育成するための運動を具体的に紹介し、全国及び自治体レベルで幼児期の運動能力の向上に取り組んでいる。

これらの二つの報告書は、幼児期の運動能力の実態を把握すると共に、幼児を取り巻く人的・物的・環境や社会性・心理的発達等のアンケートも実施し、それらの影響まで推察している。そのため、幼児期の運動能力の向上を促進すると共に幼児期における人間性の基盤形成を考える上で、貴重な資料として活用されている。

著者らは、和歌山市内の幼児の調整力の実態把握と幼児期における調整力の新たな評価視点を検証するために、2025 年 6～7 月に和歌山市内の私立幼稚園２園、私立こども園１園、公立こども園１園、公立保育所１園に所属する 184 名を対象に、自分の体そのものの移動を伴う移動系動作であり、行動を調整する能力の指標となる「両足連続跳

び越し」を実施し、動画撮影も行った。分析内容は、通常の評価基準とされている運動所要時間からではなく、調整力の質に視点を変え、動画を分析することで「正確性」「運動リズム」「運動伝導」から新たな調整力の評価視点を見出した。更に突き詰めると、これら3点が網羅されている質の高い動きは、運動所要時間を最低限に抑えることができることも明らかにすることができた（森﨑ら 2026）。

本研究では、調整力を運動所要時間に焦点を当て、対象園間及び全国との比較を行い、対象園の調整力レベルを明らかにすること、また子どもらの担任にアンケートを実施し、保育環境や活動内容状況等から調整力と幼児の社会性・心理的発達との関連性や影響を及ぼす資料を得ることを目的とした。

2　研究方法

2.1　研究倫理

研究の実施にあたっては対象児が所属する園の施設長に書面で主旨を説明し、同意書により測定参加の承諾を得た。さらに和歌山信愛大学における研究倫理委員会の承認を得ている。

2.2　両足連続跳び越し測定

2.2.1　対象

対象園及び対象児年齢、対象人数は、和歌山市内のA私立幼稚園52名（年長男児22名女児30名：以下A園とする）、B私立幼稚園72名（男児42名女児30名：以下B園とする）、C私立認定こども園23名（男児12名女児11名：以下C園とする）、D公立こども園21名（男児10名女児11名：以下D園とする）、E公立保育所16名（年長男児8名女児8名：以下E園とする）、合計5園184名（年長男児94名女児90名）である。対象児の月齢・身長・体重（以下属性とする）と比較対象とした全国の対象児の属性もあわせて表1～4に示す。

2.2.2　測定種目

測定種目は、文科省（2012-a）による「幼児の運動能力調査」より幼児を対象とする体力測定6項目の中から、自分の体そのものの移動を伴う移動系動作であり、行動を調整する能力の指標となる「両足連続跳び越し」を実施した。

表1　全国・対象園男児　人数・月齢の平均（±S.D）

年齢・項目 / 対象園	5歳児前半			5歳児後半			6歳児前半		
	N	月齢（月）		N	月齢（月）		N	月齢（月）	
A	8	64.88	±1.55	13	68.31	±1.44	1	72.00	―
B	15	64.20	±1.57	21	68.86	±1.28	6	72.83	±0.75
C	5	65.20	±0.84	5	69.20	±1.79	2	73.50	±0.71
D	1	64.00	―	6	68.67	±1.63	3	74.33	±0.58
E	3	65.33	±1.15	4	69.00	±1.83	1	74.00	―
全対象児	32	64.43	±1.43	49	68.73	±1.43	13	73.31	±0.95
全国	935	62.5	―	947	68.54	―	878	74.33	―

表2　全国・対象園女児　人数・月齢の平均（±S.D）

年齢・項目 / 対象園	5歳児前半			5歳児後半			6歳児前半		
	N	月齢（月）		N	月齢（月）		N	月齢（月）	
A	9	64.67	±1.00	14	69.36	±1.22	7	72.86	±0.90
B	15	63.60	±1.35	10	68.60	±1.35	5	72.60	±0.55
C	4	65.25	±0.50	4	69.00	±1.63	3	73.67	±0.58
D	5	64.60	±1.34	6	68.83	±1.60	―	―	―
E	3	65.00	±1.00	2	68.50	±2.12	3	73.67	±1.53
全対象児	36	64.31	±1.28	36	68.97	±1.36	18	73.06	±0.94
全国	895	62.47	―	911	68.53	―	801	74.33	―

表3　対象園男児　身長・体重の平均（±S.D）

年齢・項目 / 対象園	5歳児前半				5歳児後半				6歳児前半			
	身長		体重		身長		体重		身長		体重	
A	111.61	±3.75	20.25	±1.61	109.00	±4.04	19.07	±2.47	115.40	―	18.60	―
B	109.40	±4.40	19.31	±3.61	111.37	±3.86	19.31	±2.14	109.72	±3.60	18.22	±0.72
C	113.38	±2.72	19.98	±1.60	110.78	±4.74	19.12	±1.92	110.80	±3.96	20.00	±1.84
D	108.20	―	17.30	―	111.35	±4.80	18.02	±1.77	112.63	±3.49	20.60	±2.51
E	105.63	±3.43	16.27	±1.62	110.70	±2.74	19.08	±2.91	115.10	―	21.10	―
全対象児	109.87	±4.09	19.30	±2.88	110.62	±4.01	19.05	±2.18	111.41	±3.62	19.29	±1.72

表4　対象園女児　身長・体重の平均（±S.D）

年齢・項目 / 対象園	5歳児前半				5歳児後半				6歳児前半			
	身長		体重		身長		体重		身長		体重	
A	107.47	±4.01	17.46	±1.79	110.38	±4.47	18.49	±2.26	114.23	±3.77	20.27	±2.62
B	108.40	±3.94	19.03	±2.24	109.08	±4.49	17.96	±2.55	111.70	±3.54	20.20	±1.91
C	107.63	±1.79	18.05	±2.07	117.03	±2.23	22.45	±2.20	112.60	±5.41	19.40	±1.93
D	108.24	±5.43	18.44	±2.93	108.55	±4.09	17.85	±1.96	―	―	―	―
E	110.53	±2.12	19.17	±1.10	112.00	±3.68	19.10	±0.57	113.40	±4.59	19.23	±0.25
全対象児	108.24	±3.80	18.46	±2.15	110.54	±4.70	18.71	±2.54	113.12	±3.88	19.93	±1.98

2.2.3　測定方法と測定期間

測定方法並びに5段階評定基準は文部科学省幼児運動指針策定委員会による（文科省 2012-a）。

測定場所の設定は図1に示す。縦5㎝横5㎝長さ10㎝の10本の障害物を並べた約4m50㎝の中央位置から5mの距離をとりビデオカメラ（Kenko　ZF-300WSH）を設置し撮影した。測定を実施する前には、文科省の留意点に習い、①速さだけを強調せず、一つ一つ両足を揃え跳び越すことを強調する、②両足が数㎝離れている場合（積み木の

幅程度）は良いが、大きく離れたりバラバラになった場合はやり直す、③「お休みなしで跳ぶ」「うさぎさんのように跳ぶ」などの表現で跳び方を示す。以上を対象児に伝えた上で、見本をみせながら一緒に両足で５回前方に跳んだ。さらに、各対象児１回ずつの試技の後、２回の測定を実施し動画を撮影した。測定は 2025 年６～７月に実施した。

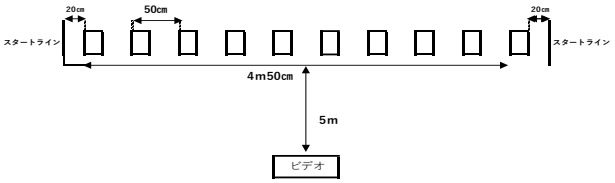


図１　両足連続跳び越し測定の場の設定

2.3　アンケート調査

2.3.1　対象

対象園対象児のクラス担任にアンケートを実施した。A 園６名、 B 園３名、C 園１名、D 園２名、E 園２名、計 14 名を対象とした。

2.3.2　アンケート内容と調査期間

文科省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」（文科省 2012-a）の担任に対するアンケート項目を参考にした（表 5）。調査は、2025 年 6～7 月に実施した。

3　結果及び考察

3.1　対象児の男女の比較

まず、対象児の「両足連続跳び越し」の測定記録から運動所要時間の男女差を、t 検定を行い確認した。森ら（2017）、森田（2020）の先行研究においては、性差は視られない結果が報告されている。しかし本研究対象児においては、5 歳前半、5 歳後半の年齢区分において男児が女児よりも記録が有意に優れていた（表６・図２）。

表５　担任へのアンケート内容

担任先生方へ聞き取り調査

園名（　　）　年齢（　　）性別（　　）

最近1カ月の園での子どもの様子から、以下の子どもがどのくらいいるか、各項目についておおよそのクラス内の割合を教えて下さい。該当する番号に〇をして下さい。

5.とても多い（80%以上）　4.多い（60～70%位）　3.普通（50%位）　2.少ない（30～40%位）　1.とても少ない（20%以下）

問1　子どもの園生活全般について					
（1）朝、楽しそうに登園する	5	4	3	2	1
（2）朝から疲れている	5	4	3	2	1
（3）あいさつができる	5	4	3	2	1
（4）昼食をおいしそうに食べている	5	4	3	2	1
（5）昼食を残す	5	4	3	2	1
（6）話を聞くとき集中力がない	5	4	3	2	1
（7）室内で過ごすことが多い	5	4	3	2	1
（8）運動が嫌い	5	4	3	2	1
（9）よく戸外で遊ぶ	5	4	3	2	1
(10) 体を動かすことが楽しそう	5	4	3	2	1
問2　子どもの自立について					
（1）食事を意欲的に食べる	5	4	3	2	1
（2）自分の係は喜んでやる	5	4	3	2	1
（3）遊んだ後の片付けをする	5	4	3	2	1
問3　子どもの行動について					
（1）我慢強い	5	4	3	2	1
（2）やる気 （何でもやってやろうという気持ちがある）	5	4	3	2	1
（3）一つのことに集中できる	5	4	3	2	1
（4）友達とうまくつきあえる	5	4	3	2	1
問4　子どもの心身の状態について					
（1）ちょっとしたことでイライラする	5	4	3	2	1
（2）気分が落ち込むことがある	5	4	3	2	1
（3）急に怒ったり、泣いたり、喜んだりする	5	4	3	2	1
（4）ちょっとしたことでかっとなる	5	4	3	2	1
（5）腹痛を訴える	5	4	3	2	1
（6）頭痛を訴える	5	4	3	2	1
問5　子どもの体を動かす遊びや運動の機会（園内）について					
（1）体を動かす遊びや運動が十分な時間できている	5	4	3	2	1
（2）体を動かす遊びや運動をしたいところでできている	5	4	3	2	1
（3）体を動かす遊びや運動をしたい人とできている	5	4	3	2	1

現在実施されている「園での体を動かす遊びや運動」とその指導者についてお訪ねします。各項目について、一番近いものの数字を枠の中に入れてさい。指導者の該当者がいない場合は斜線を入れて下さい。

問6　週何日実施していますか。該当する番号を入れて下さい。

1．毎日	担任自身	（　　）
2．週３～４日	担任以外の保育者	（　　）
3．週１～2日	園外の専門指導者	（　　）
4．週1日未満	その他（　　）	（　　）
5．その他　（　　）		

問7　1回どのくらいの時間実施していますか

1．3時間以上	担任自身	（　　）
2．2時間くらい	担任以外の保育者	（　　）
3．1時間くらい	園外の専門指導者	（　　）
4．30分未満	その他（　　）	（　　）

問8　普段、主にどこで実施していますか

1．園庭	担任自身	（　　）
2．遊戯室	担任以外の保育者	（　　）
3．教室	園外の専門指導者	（　　）
5．その他　（　　）	その他（　　）	（　　）

問9　具体的にどのような体を動かす遊びや運動を実施していますか。よく行うものを３つあげてください。

担任が行う場合　（　　）・（　　）・（　　）

担任以外の保育士が行う場合　（　　）・（　　）・（　　）

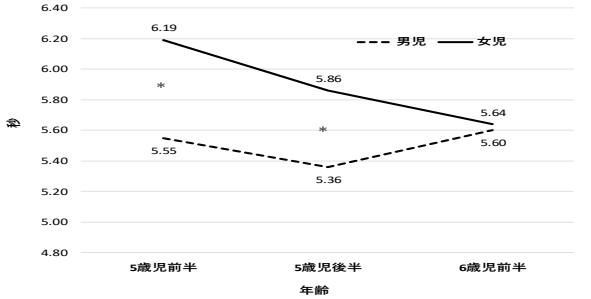
その他　（　　）・（　　）・（　　）

ご協力ありがとうございました。

表６　対象児の平均（±標準偏差）の男女の比較

性別・N・記録 / 年齢	男児 N	男児 記録（秒）		女児 N	女児 記録（秒）		P
5歳児前半	32	5.55	±0.89	36	6.19	±0.97	*
5歳児後半	49	5.36	±0.89	36	5.86	±0.68	*
6歳児前半	13	5.60	±0.91	18	5.64	±0.80	n.s

＊ $p<0.01$



＊ $p<0.01$

図２　対象児の平均の男女の比較

3.2　全国との比較

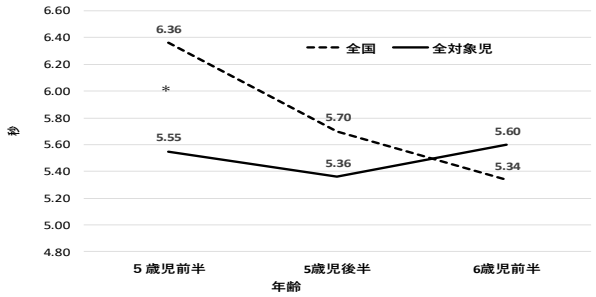
3.2.1　男児

対象児男児と全国（森ら 2017）とのｔ検定を行った（表7・図3)。5 歳前半は、全国よりも対象児男児の方が有意であった。5 歳後半は記録が伸びるものの、6 歳前半は 5 歳後半よりも記録は低くなっている。しかし、全国は、5 歳後半、6 歳前半と順当に記録が伸びている。

表７　対象児男児と全国との平均（±標準偏差）の比較

グループ・N・記録 / 年齢	全国 N	全国 記録（秒）		全対象児男児 N	全対象児男児 記録（秒）		p
5歳児前半	935	6.36	±2.29	32	5.55	±0.89	*
5歳児後半	947	5.70	±1.55	49	5.36	±0.89	n.s
6歳児前半	878	5.34	±1.43	13	5.60	±0.91	n.s

＊ $p<0.05$



＊ $p<0.05$

図３　対象児男児と全国の平均の比較

3.2.2　女児

対象児女児と全国（森ら 2017）とのｔ検定を行った（表8・図4)。対象児女児は、5 歳前半、5 歳後半、6 歳前半と記録を伸ばし、全国の記録と同傾向を示している。

表８　対象児女児と全国との平均（±標準偏差）の比較

グループ・N・記録 / 年齢	全国 N	全国 記録（秒）		全対象児女児 N	全対象児女児 記録（秒）		p
5歳児前半	895	6.30	±1.83	36	6.19	±0.97	n.s
5歳児後半	911	5.74	±1.44	36	5.86	±0.68	n.s
6歳児前半	801	5.42	±1.36	18	5.64	±0.80	n.s

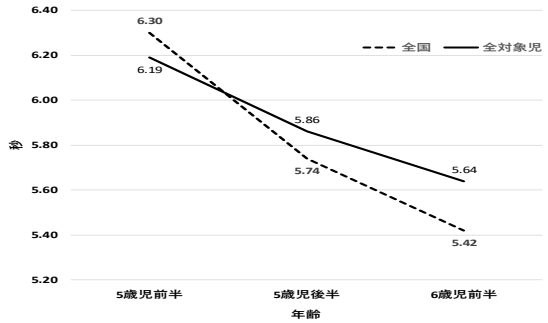


図４　対象児女児と全国の平均の比較

3.3　対象園間の比較

3.3.1　男児

男児の対象園間においてｔ検定を行った（表9)。

各対象園各年齢の平均の推移を比較しみていく。5 歳前半は、対象児 1 名の対象園Ｄを除いては、速い順から対象園 C5.40 秒、B5.45 秒、E5.53 秒、A5.55 秒と、上位から下位までの差 0.15 秒という僅差である。しかし、5 歳後半は、対象園Ｃが平均を 0.9 秒と大幅に伸ばし、B0.16 秒、A0.09 秒と、同様に伸びている。対象園Ｅだけは 0.12 秒記録を下げ、平均の順位は、速い順から対象園 C4.50 秒、B5.29 秒、A5.46 秒、E5.65 秒、D5.90 秒となり、上位から下位までの差は 1.4 秒に広がっている。 6 歳前半は、対象児 1 名の対象園Ａ と Ｅを除くと、対象園Ｂだけが 0.09 秒記録を伸ばし、Ｃが 1.2 秒大きく記録を下げＤも 0.63 秒低くなっている。順位は対象園 A4.90 秒、B5.18 秒、C5.70 秒、E5.80 秒、D6.53 秒となった。

男児の平均値の対象園間の比較において、5 歳児後半ではＣ園が他の４園と比べ、有意であった。また、６歳児前半ではＢ園がＣ園と比べ、有意であった。

表９　対象園間男児の平均（±標準偏差）の比較

対象園	性別・N・記録 / 年齢	男児 N	男児 記録（秒）		P	
A	5歳児前半	8	5.55	±0.87		
	5歳児後半	13	5.46	±0.75	C	＊
	6歳児前半	1	4.90	－		
B	5歳児前半	15	5.45	±0.94		
	5歳児後半	21	5.29	±0.81	C	＊
	6歳児前半	6	5.18	±0.41	D	＊＊
C	5歳児前半	5	5.40	±0.60		
	5歳児後半	5	4.50	±0.34	A B D È	＊ ＊ ＊ ＊＊
	6歳児前半	2	5.70	±2.12		
D	5歳児前半	1	7.80	－		
	5歳児後半	6	5.90	±1.50	C	＊
	6歳児前半	3	6.53	±0.45	B	＊＊
E	5歳児前半	3	5.53	±0.38		
	5歳児後半	4	5.65	±0.48	C	＊＊
	6歳児前半	1	5.80	－		

＊ $p<0.05$　＊＊ $p<0.001$

表 10　対象園間女児の平均（±標準偏差）の比較

対象園	性別・N・記録 / 年齢	女児 N	女児 記録（秒）		P	
A	5歳児前半	9	5.49	±0.63	B D È	＊ ＊＊＊ ＊＊
	5歳児後半	14	5.48	±0.61	B D	＊＊＊ ＊
	6歳児前半	7	5.93	±1.10		
B	5歳児前半	15	6.33	±0.85	A C	＊ ＊
	5歳児後半	10	6.20	±0.47	A	＊＊＊
	6歳児前半	5	5.58	±0.73		
C	5歳児前半	4	5.53	±0.45	B D È	＊ ＊ ＊
	5歳児後半	4	5.58	±0.41		
	6歳児前半	3	5.23	±0.25		
D	5歳児前半	5	7.12	±1.12	A C	＊＊＊ ＊
	5歳児後半	6	6.23	±0.92	A	＊
	6歳児前半	－	－	－		
E	5歳児前半	3	6.97	±0.91	A C	＊＊ ＊
	5歳児後半	2	6.20	±0.28		
	6歳児前半	3	5.47	±0.32		

＊ $p<0.05$　＊＊ $p<0.01$　＊＊＊ $p<0.001$

3.3.2　女児

女児の対象園間において t 検定を行った（表 10）。

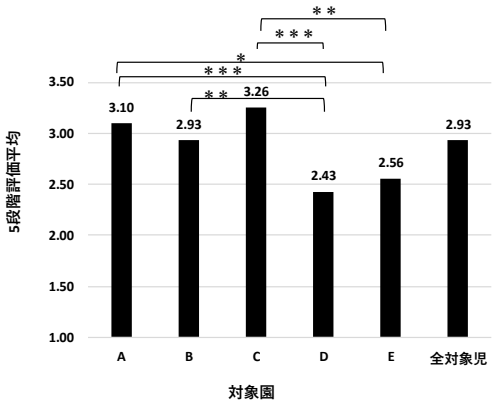
女児の 5 歳児前半は各対象園の平均の差が大きく、順位は速い方から対象園 A5.49 秒、C5.53 秒、B6.33 秒、E 6.97 秒、D7.12 秒であった。上位から下位までの差は 1.63 秒であった。5 歳後半は、記録を伸ばした園は、対象園D 0.89 秒、E 0.77 秒、B 0.13 秒、A 0.01 秒であり、唯一Cは 0.05 秒下げている。それでも順位に変わりはなく、対象園 A5.48 秒、C5.58 秒、B と E は 6.20 秒同位、D6.23 秒の順であった。6 歳前半は、対象園Eが 0.73 秒、B 0.62 秒、次いで 5 歳後半に平均を下げた対象園Cが 0.35 秒記録を伸ばしている。対象園Aは 0.45 秒大きく下げ、最終的に対象園C5.23 秒、E 5.47 秒、B 5.58 秒、A 5.93 秒と順位は大きく入れ替わる結果となった。

女児の平均値の対象園間の比較において、5 歳児前半では A 園と C 園が B・D・E 園と比べ、有意であった。5 歳児後半では A 園が B・D 園と比べ、有意であった。

3.3.3　対象園間の 5 段階評価平均値の比較

更に、対象園の 5 段階評価の平均値の検討を行った。5 段階評定基準は文部科学省幼児運動指針策定委員会による（文科省 2012-a）。各対象児の記録を性別年齢別に 5 段階評価し、各園の平均を算出し比較を行った（図 5）。5 段階評価の平均は、高い順に対象園 C3.26、A3.10、B2.93、E2.56、D2.43 であった。

対象園間の 5 段階評価の平均値の比較において、A 園と C 園が D・E 園と比べ、有意であった。また B 園が D 園と比べ、有意であった。



＊ p <0.05　＊＊ p <0.01　＊＊＊ p <0.001

図 5　対象園間の 5 段階評価平均の比較

以上の結果から、「両足連続跳び越し」の所要時間からみると、５園の中ではＡ・Ｃ園が他の３園に比べ、調整力が高い傾向があることが示された。

3.4　アンケート結果

3.4.1　問 1～5

問 1～問 5 の設問は、5 歳児の担任の目線で子ども達の生活や行動面、心身の状態を捉えたもので、問いに対して 5 はとても多い(80%以上)、4 は多い（60～70%位)、3 は普通（50%位)、2 は少ない（30～40%位)、1 はとても少ない（20%以下）で回答している。複数担任の園は平均値を出し、全体の平均は 14 名の回答から平均を算出している。各設問が肯定的な内容の場合は、平均より高い、もしくは同じ値の園に、否定的な設問の場合は平均より低い、もしくは同じ値に２重下線を表記し、その数をポイントとし、最下段にポイント合計を表記した。

高井（2018）は、幼児期には主に調整力を獲得しながら基本的運動技能とともに、その後の専門的運動技能の発達に向けて移動系、操作系、平衡系から成る基本的動作の習得が望まれ、その継続的な取り組みは、体力・運動能力への直接的な発達を促すとともに、各発達期の社会性・心理的発達にも直接・間接の関連性を及ぼすことを示唆している。

今回のアンケートは担任の目線で子ども達の生活や行動面、心身の状態をおおよその割合で捉え数値化したものを分析した結果である。幼児の社会性・心理的発達との関連について、Ａ・Ｃ 園が他の３園よりもポイント合計が高い傾向が示された。この結果は、先述の「両足連続跳び越し」の所要時間からみた調整力の高さの比較と同じ結果が得られた。

表 11　アンケート結果（子どもの園生活全般について）

問＼対象園	A	B	C	D	E	全対象園
（1）朝、楽しそうに登園する	5	4.3	5	5	4.5	4.8
（2）朝から疲れている	1	1.7	1	1	2	1.3
（3）あいさつができる	4.8	4	3	4	4.5	4.4
（4）昼食をおいしそうに食べている	4.8	3.7	5	4.5	4	4.4
（5）昼食を残す	1	2.3	1	1	1	1.3
（6）話を聞くとき集中力がない	1.8	4	2	2.5	1.5	2.4
（7）室内で過ごすことが多い	3	2.3	3	1.5	2	2.5
（8）運動が嫌い	1.3	1	1	1.5	1.5	1.3
（9）よく戸外で遊ぶ	3.7	4	5	5	3.5	4
（10）体を動かすことが楽しそう	4.8	5	5	5	4.5	4.9
ポイント	7	4	8	7	4	

表 12　アンケート結果（子どもの自立について）

問＼対象園	A	B	C	D	E	全対象園
（1）食事を意欲的に食べる	4.7	3.7	5	ー	4.5	4.5
（2）自分の係は喜んでやる	5	5	5	5	5	5
（3）遊んだ後の片付けをする	4.8	3	5	4.5	4.5	4.4
ポイント	3	1	3	2	3	

表 13　アンケート結果（子どもの行動について）

問＼対象園	A	B	C	D	E	全対象園
（1）我慢強い	4.3	3	3	4	2.5	3.6
（2）やる気	4.8	4.3	5	4.5	4.5	4.6
（3）一つのことに集中できる	4.7	3.3	5	4.5	4	4.3
（4）友達とうまくつきあえる	4.3	3.3	5	4.5	3.5	4.1
ポイント	4	0	3	3	0	

表 14　アンケート結果（子どもの心身の状態について）

問＼対象園	A	B	C	D	E	全対象園
（1）ちょっとしたことでイライラする	1.3	1.7	2	1	1.5	1.4
（2）気分が落ち込むことがある	1.7	1.7	2	2.5	1.5	1.8
（3）急に怒ったり、泣いたり、喜んだりする	1.2	1.7	1	1.5	2	1.4
（4）ちょっとしたことでかっとなる	1.2	1.3	1	1	2	1.3
（5）腹痛を訴える	1	1	1	1	1	1
（6）頭痛を訴える	1	1	1	1	1	1
ポイント	6	4	4	4	3	

表 15　アンケート結果
（子どもの体を動かす遊びや運動の機会（園内）について）

問＼対象園	A	B	C	D	E	全対象園
（1）ちょっとしたことでイライラする	1.3	1.7	2	1	1.5	1.4
（2）気分が落ち込むことがある	1.7	1.7	2	2.5	1.5	1.8
（3）急に怒ったり、泣いたり、喜んだりする	1.2	1.7	1	1.5	2	1.4
（4）ちょっとしたことでかっとなる	1.2	1.3	1	1	2	1.3
（5）腹痛を訴える	1	1	1	1	1	1
（6）頭痛を訴える	1	1	1	1	1	1
ポイント	6	4	4	4	3	

3.4.2　問 6～8（運動量）

問 6～8 には、園内での運動遊び担当者、1 週間の運動量について回答されている。表 16 に整理した。

表 16　対象園の運動量

担当者	担任				担任以外				外部専門指導者			
項目／対象園	毎日	週 3～4 日	週 1～2 日	週1日未満	毎日	週 3～4 日	週 1～2 日	週1日未満	毎日	週 3～4 日	週 1～2 日	週1日未満
A	○	○	○				○				○	
B		○				○					○	
C	○										○	
D	○				○							
E		○				○						
項目／対象園	3時間以上	2時間位	1時間位	30分未満	3時間以上	2時間位	1時間位	30分未満	3時間以上	2時間位	1時間位	30分未満
A			○	○				○			○	
B			○				○				○	
C			○								○	
D			○				○					
E			○	○			○					
項目／対象園	園庭	遊戯室	教室	その他	園庭	遊戯室	教室	その他	園庭	遊戯室	教室	その他
A	○	○			○	○			○	○		○
B	○				○				○			
C	○									○		
D	○				○							
E	○				○							

表 16 より、担任は 5 園とも毎日、もしくは 3～4 日運動を 1 時間程度屋外で行っている。担任以外は、対象園 A は週 1～2 日 30 分未満、他の園はほぼ担任と同じ時間、屋外で行っている。大きな違いは、対象園 A、B、C は外部専門指導者が週 1～2 日、1 時間程度指導に当たっている点である。場所は、園庭や遊戯室であるが、1 週間の運動量を増やすことができている。

3.4.3　問 9（運動や遊びの内容）

問 9 は、運動や遊びの内容の質問項目である（表 17）。5 園とも調整力の育成を考慮した運動を取り入れていることが読み取れる。今回の課題の特性である両足跳びが含まれる「縄跳び」「大縄」「跳び箱」には二重下線を入れた。

各園の特徴をみていく。A 園は、各担任が 6 名、縦割りクラス編成で保育を行っており、運動を行う時間は、年齢別の横割り保育を行っている。運動の種類が多く、跳躍運動に多くの時間を費やしていることも読み取れる。B 園も行う運動種類は豊富で跳躍運動も取り入れている。C 園は、運動の種類こそ A、B 園に比べ少ないが、跳躍運動は行っている。A、B、C 園は外部の運動指導者が入ることで運動種目内容に広がりを視ることができた。それは記録に効果として表れている傾向が読み取れる。D 園は、運動の種類が少なく、跳躍運動は行われていないことが読み取れる。E 園は、運動の種類は少ないが、担任が跳躍運動を行っている。

表 17　対象園の運動・遊びの内容

担当者／対象園	担任				担任以外				外部専門指導者		
A	ドッジボール	縄跳び	鉄棒	大縄	ドッジボール	縄跳び	ボール遊び	跳び箱	リズムジャンプ	ボール遊び	走る
	鬼ごっこ	ダンス	固定遊具		ダンス	リズム運動	マット				
B	ドッジボール	自由遊び	ハンカチ落とし	鉄棒	跳び箱	縄跳び	鉄棒		鉄棒	ボール遊び	跳び箱
C	ドッジボール	大縄	リレー						縄跳び	マット	鉄棒
D	体操	鬼ごっこ	リズム運動		体操	鬼ごっこ	リズム運動				
E	ドッジボール	鬼ごっこ	縄跳び	タグラグビー							
	段ボールキャタピラ	ロディ									

これら問 6～問 9 のアンケート結果より、運動時間、多様な種類の運動経験、「両足連続跳び越し」に関連する運動の経験が「両足連続跳び越し」の記録を高めている傾向を伺うことができた。森ら（2017）は、6 種目の測定結果から幼児期の運動能力の高さとの関係をみているが、運動時間や運動内容に関しては同傾向の考察を示している。また、杉原ら（2010）は、外部専門指導者の一定時間の運動指導よりも保育時間を通して運動習慣を身につける方が、運動能力が高かったとあるが、本研究では外部専門指導者によって一定の効果があると示された。これは、外部専門指導者と担任保育者が連携をとり、保育につなげていった結果であると推察される。

4　まとめ

本研究の目的は二つを挙げている。一つ目は、和歌山市 5 園 184 名に調整力の指標である「両足連続跳び越し」の測定を実施し、所要時間から全国との比較を行い、また対象園間の特性を明らかにすることである。二つ目は、対象児の担任にアンケートを実施し、保育環境や活動内容状況等から社会性・心理的発達の関連性や調整力との影響を明らかにすることである。

以下の点が明らかになった。

1．対象児の両足連続跳び越しは、6 歳児前半を除いて男児が女児よりも記録が優位に優れていた。

2．5 歳前半の対象児男児の記録は、全国を優位に上回っ

た。

３．調整力の発達と、社会性・心理的発達との関連も関連性があることが示唆された。

４．調整力の高さと、園での運動時間、運動や遊びの内容には関連性が示された。すなわち、ほぼ毎日、多様な動きを経験している園の園児の方が、調整力は高い傾向が示された。

今回は、和歌山市の５園での比較であったが、今後さらに多くの園のデータを収集することにより、和歌山県下の運動能力の比較につながると考えられる。また、184 名の段階分けをし、それぞれの課題に沿った指導アプローチ及び遊びの検討を考えていきたい。

謝辞

本研究にご協力頂きました対象児の所属園施設長並びに先生方、測定に参加ご協力いただきました園児の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

飯嶋裕美・木塚朝博・鈴木寛泰・速水達也・板谷厚・岩見正人（2010）　「不安定な接地面での両足連続跳躍における幼児の身体コントロール能力」　『体育学研究』　55　pp. 45-54

石川利寛他（1987）「調整力に関する研究成果のまとめ」『体育科学』　15　pp. 75-87

大村一光・森司朗（2008）　「幼児の運動能力に関する研究～跳運動における運動様式の実態と課題～」『南九州地域科学研究所所報』　第 24 号　pp. 27-40

岡本健・奈良女子大学文学部付属幼稚園幼年教育研究会（1989）　『調整力を高める運動遊び』　ひかりのくに株式会社

城戸佐智子・中野裕史（2015）　「幼児の運動能力の現状と課題」　『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』　第 47 号　pp. 223-230

木戸貴弘（2022）　「幼児期の運動能力調査の意義と結果の活用方法」　『別府大学短期大学部幼児・児童教育研究センター　センターレポート』　41　pp. 49-54

クルト・マイネル・金子明友訳（1988）　『マイネルスポーツ運動学』　大修館書店

近藤幹生・徳安敦・山本明美（2018）　『生活事例からはじめる－保育内容－健康』　青踏社

杉原 隆・森司朗・吉田伊津美（2010）　「幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係」『体育の科学』　60（5）　pp.341-347

高井和夫（2007）　「子どもの調整力に関する研究動向について」　『生活科学研究』　29 巻　pp. 115-128

高井和夫（2018）　「子どものこころと体の調整力を支える実行機能の役割」　『生活科学研究』　40 巻　pp. 83-93

西村誠・山口孝治（2015）　「幼児期の調整力の学習効果についての縦断的研究」　『佛教大学教育学部学会紀要』　第 14 号　pp. 109-115

森司朗・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮（2017）　「幼児の運動能力の現状と運動発達促進のための運動指導及び家庭環境に関する研究」『平成 20～22 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書』

森﨑陽子・中村俊之・前島美保・飯田まなみ（2026）「両足連続跳び越しの動作分析からみた幼児の調整力評価の新たな視点」　『和歌山信愛大学紀要』　第 7 巻　pp.31-40

森田晴美（2020）　「幼児の運動能力に関する一考察」『保健福祉学研究』　第 17・18 号合併号　pp. 45-54

文部科学省（2012-a）　「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」　https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm　2025 年 5 月 1 日閲覧

文部科学省（2012-b）　「幼児期運動指針」　https://www.mext.go.jp › afieldfile › 2012/05/11　2024 年 6 月 10 日閲覧